

題字・新井 京華

人ひと

互いに支え合ってこそ……、そんな人模様を

「お客様の前でステーキを焼く。言葉を交わしながら。これが性に合っているんですよ」

南牧村の実家から高崎工業高校に通っていた頃、アルバイト先のレストランで「お前、コックに向いてるぞ」と言われたことが人生を決めた。20数年前だ。建設会社に進む友人を横目に、料理専門学校に入学。洋食、イタ

肉の魅力在五感で味わう

「お客様の前でステーキを焼く。言葉を交わしながら。これが性に合っているんですよ」

南牧村の実家から高崎工業高校に通っていた頃、アルバイト先のレストランで「お前、コックに向いてるぞ」と言われたことが人生を決めた。20数年前だ。建設会社に進む友人を横目に、料理専門学校に入学。洋食、イタ

「肉は最高級のランクだけを使います。魚も野菜も厳選しています。それらの素材が、お客様の目の前で料理に。ジューッという音と、肉につく焼き色。燃え立つ炎、ただよう香り。料理人の動作

……。味覚はもちろん、視覚も聴覚も嗅覚も、肉の魅力在五感で味わえるのが、カウンター式の店の真骨頂です」

たまの外出は「晴れの場」。料理の出来はもちろん、器も、接客も、店内の雰囲気も「納得の味」を出さなければ。

「せっかくだからお金を使って外食していただくんですから、「最高においしいも



たまの外出なんだから最高においしいステーキを

いはら さとる
伊原 智さん

鉄板焼きステーキ&海鮮「ぶりっく」オーナーシェフ
高崎市八千代町 (TEL027・321・5638)

の、を、が大切
ふれた
で家族
ご期待
接合せ
合わせ
希望通
が焼け
きを見
るのか
それが
お金を
言える
違い、
い真剣
を見れ
出来も
「ミス
張感と
の笑顔
感。こ
こにあ
忘年
て12
マステ
0円と
「和牛
ビ・フ
全9品
対の自
賞味
もの
物だと

地域コミュニティ

たかさき 毎日

2008年11月号 NO.233

発行所(編集室) 毎日新聞高崎地区販売所
〒370-0042高崎市貝沢町856 ☎027-361-0378
発行人 金井美次 / 印刷 毎日新聞北関東コア
毎日新聞の姉妹紙です。

家 土地

お売り下さい

株式会社ビルド住宅流通 ☎027-370-2272

装飾塗装で現代の名工

デコラティブ・ペイント(装飾塗装)の先駆者・木暮実さん(高崎市中尾町)が、現代の名工に選ばれた。遊び心いっぱいの塗装技術だ。(記事3面)

高橋龍治さん、新曲発表会で熱唱

“山の向こうに故郷が”

歌手の高橋龍治さん＝写真中央＝の新曲「山の向こうに故郷が」と「螢火夜景」（キングレコード、ともに万城たかし作詞・矢島ひろ明作曲）の発表会が、この市小坂八木で開かれた。



歌手仲間ら50人余が参加して、新曲の誕生を祝った。高橋さんは新曲のほか、「北海の龍」「倉賀野河岸」などの持ち歌も披露。盛んな拍手を浴びていた。

角野卓造さん主演の人情喜劇

12月15日 高崎演劇鑑賞会例会

高崎演劇鑑賞会の第323回例会として、おなじみの個性俳優・角野卓造主演による七転八倒中年親父の青春物語「ゆれる車の音～九州テキ屋旅日記」（劇団文学座公演）が12月15日（月）午後7時から、高崎市文化会館で開かれる。

宮崎県・油津。愚連隊にショバを荒らされ町を追われたテキ屋の金丸一家組長・金丸重蔵（角野）が20年ぶりに帰ってきた。女房（塩田朋子）・娘（栗田桃子）を連れ、ショバを取り戻すため。決死の覚悟で乗り込んだ乙姫神社の境内はすっかりさびれていた。「金丸帰る」の報に、元愚連隊の親玉（たかお鷹）は、頭に血が上って……。

時代錯誤のハタ迷惑なふたりが、周囲を巻き込んで。笑って笑って、ほろっと……。人情喜劇の決定版を楽しむ企画。

高崎演劇鑑賞会は、入会金1000円、月会費3000円（高校生以下1500円）。

問い合わせ・入会申込などは同鑑賞会（高崎市江木町309-5-102。電話・ファクス027・323・0955）新井さんまで。

現代の名工に 木暮実さん

デコラティブ・ペイント（装飾塗装）の先駆者



高崎市中尾町で「木暮塗装」を営む木暮実さん（57）が、芸術性豊かな技法を駆使した塗装で模擬模様や絵画を描くデコラティブ・ペイント（装飾塗装）の先駆者として、「現代の名工」に選ばれた。



木暮さんの店の壁画は人目を引く

木暮さんによると、この技法は壁に直接額縁や名画の模写を描くのをはじめ、木目や大理石の模様、花や葉を模写するなど、遊び心にあふれた塗装技術。ヨーロッパ王室の室内装飾画として始まり、移民とともにアメリカやオーストラリアに広がったという。国内でもテーマパークやホテル、オフィスビ

塗装職人の技術に、芸術センスと遊び心

ル、洋風住宅などへの需要が増えている。JR上越線の井野―新前橋間の線路沿い、日高病院の近くにある木暮さんの店の外壁には、この技法を使用した大きな壁画がある。世相を反映したものをテーマにして2年ごとに交えており、今は子どもを抱いた女性が

描かれている。「子どもにとって受難の時代ですから」と木暮さんは話す。木暮さんは、中之条町出身。高崎市の職業訓練校を経て、市内の塗装店に住み込みで仕事を始めた。「子どものころから絵が好きで、最初は看板をやらせてくれるという話だったのでこの世界に

現代の名工 卓越した技能を持ち、その道で第一人者と目されている技能者を表彰する国の制度で、67年に創設された。今年には木暮さんをはじめ県内で4人が選ばれ、県内での受彰者は91人になった。

入った」と振り返る。しかし時代は東京五輪後の住宅ブーム、建築塗装の仕事に追われる日が続いた。20代の半ばで独立。そのころ、愛知県大山市の「明治村」を訪れた際、そこにある建物の木目調仕上げを見て、デコラティブ・ペイントに興味を持った。当時、国内でこ

木暮さんは、埼玉県にある「ものづくり大学」で講師を務めるほか、頼まれれば全国各地へも教えに行き、技術の普及に努めている。「教えるには、基礎をしっかり固めなければ」と、今年春から武蔵野美術大学で造形の勉強も始めた。

トは、塗装職人としての下地づくりの技術に加え、東京に通って、その技を学んだ。デコラティブ・ペイン

定期購読お申込み